# 西二葉町遺跡発掘通信

No. 5
令和６年
10月号

## 地元説明会を開催しました

ようやく秋の気配が感じられるようになってきました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。西二葉町遺跡の発掘調査につきましても、そろそろ終盤を迎えつつあります。

さて、九月十四日（土）と十五日（日）に、発掘調査現場での説明会を開催させて頂き、出土した遺物の展示・説明と、現場内での遺構の説明を行いました。両日合わせ、七百十名もの方々にご来場いただき、大変ありがとうございました。ご来場された方の中には、明和高等学校の卒業生である方やご縁のある方々もたくさんいらっしゃいました。改めて、歴史が息づいている場所であることを認識し、発掘調査を実施するにあたり、身の引き締まる思いを持ちました。またいろいろな場面において、たくさんの方々とお話しできる機会となり、当方も大変楽しい時間を過ごすことができ、大変感謝しております。

今回の説明会の開催および日々の発掘調査が安全に遂行できているのは、明和高校および工事関係者、地域の方々等の多くの方々のご協力があってのことと考えております。

今年度の発掘調査は、十一月末で終了しますが、今後ともご協力の程、よろしくお願い申し上げます。（調査課　堀木真美子）

## 地元説明会の開催終了について

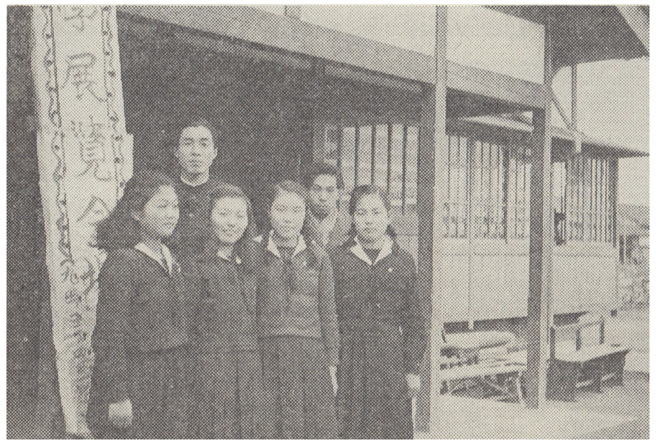
九月十四日（土）・十五日（日）の二日間にわたり、西二葉町遺跡地元説明会を開催しました。各日、全体説明は、午前十一時からと午後二時からの二回、合計四回実施し、時間内は随時見て頂けるように開放致しました。当日は、明和高等学校文化祭「明彩・明和祭２０２４」の開催に合わせたこともあり、計七一〇名と、とても多数の方々にご来跡頂きました。ありがとうございました。

遺跡調査はまだ続きます。今後とも調査経過の情報発信をして参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。（川添和暁）

## 明和高等学校と考古学

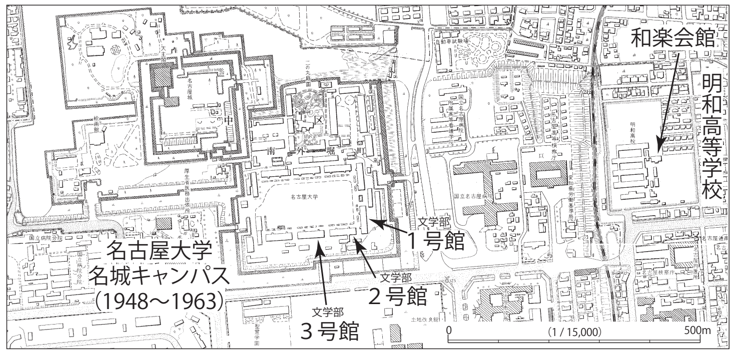
太平洋戦争後、日本各地で考古学ブームが起こり、考古学が各地で広く一般市民に親しまれるようになりました。市民のための、自ら行う真の歴史探究として、考古学が注目された訳ですが、この頃以降、発掘調査を含めて高校生らによる考古学研究への参画の機会がとても多くなりました。これは全国的な動向でした。

昭和二十三（一九四八）年十月に誕生した愛知県立明和高等学校では、学校統合当初から生徒さんの部活動が活発であったようです。『愛知縣第一高等女學校史』（一九八八年刊行）には、歴史研究部の活動内容が記されており、考古学関係の記事を見ることができます。本書によると、昭和二十四年一月に社会科教員引率のもと、三重県多度方面の史跡を訪ね、多度神社（当時）に伝わる平安時代の和鏡三十面を拝観しています。さらに同年三月には和楽会館で「考古学展覧会」を開催しました。この日のために生徒らは笠寺方面で出土した土器やその他遺物について調べ、展示方法を考え、考古学年表を作成したといいます。また、名古屋大学に着任される澄田正一を招いた講演会を開き、とても盛況であったようでした。



和楽会館での考古学展開会（昭和 24 年）【「愛知縣第一高等女學校史」(1988)より】
和楽会館は第一高等女学校当時の講堂で、明和高等学校でも使用されていました。
※右から２番目は、名古屋大学 澄田正一 先生

戦時中にできた名古屋帝国大学は、戦後の昭和二十三年九月、文学部、法経学部と文科系学部が創設され、総合大学として名古屋大学が誕生します。昭和二十四年五月に新制の名古屋大学が発足し、この頃、文学部では本格的な学部の基礎作りがされたようです。キャンパスは、現在は名古屋城二の丸跡地にあたる、旧陸軍第三師団歩兵第六聯隊跡を使用し、本部のほか文系学部が入りました。




昭和 33 年頃の明和高等学校と名古屋大学の位置
【名古屋市都市計画図「名古屋城」「大津橋」より】
文学部校舎位置は『名古屋大学文学部二十年の歩み』（1968）より

澄田正一は、昭和二十一年四月に東洋史学担当として第八高等学校に赴任、同七月に教授となります。昭和二十四年四月より名古屋大学文学部で考古学概説の授業を担当し、同年八月に助教授に就任、史学科第五講座で考古学の担当教官となりました。その後、文学部考古学研究室の主任教授として研究室の礎を築くこととなります。京都帝国大学出身で、東洋考古学で著名であった澄田にとって、和楽会館での講演は名古屋での考古学活動の初期であり、この地に根ざした研究視野を広げる契機になったかもしれません。

文学部考古学研究室の入っていた文学部三号館は、かつての第十中隊兵舎跡でした。現在は犬山市の博物館明治村に移築保存されています。（川添和暁）

西二葉町遺跡発掘通信
No. 5 令和6年10月号
編集・発行
公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話（0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Instagram https://www.instagram.com/aichimaibun/
X https://twitter.com/aich
印刷・協力　安西工業株式会社

# 八月・九月実施の調査について

前号では、七月の調査成果について簡単にご紹介しました。八月の調査成果につきましては、音楽棟エリア24Ｂ区の中でも北端の24Ba区で、近世の整地層（盛土）下の遺構調査を実施し、成瀬家屋敷関連の遺構のほか、戦国期にもさかのぼる可能性のある成瀬家屋敷地以前の区画溝を調査いたしました。詳細は、先日実施の地元説明会当日配布資料に掲載しております（左図）。この配付資料は埋蔵文化財センターのホームページから、ＰＤＦデータのダウンロードが可能です。左上のＱＲコードからアクセスもできますので、よろしければ是非ご覧下さい。紙面の都合もあり大変恐縮ですが、ここでは地元説明会以降の調査成果について、お知らせいたします。

音楽棟エリア24Ｂ区北端の24Ba区の調査終了後、すぐに南側に隣接している24Bb区の調査に入りました。（調査区の位置は、三頁目下の写真に示してあります。）地元説明会では、近世江戸時代の整地層（盛土）上面で確認された遺構調査の様子を見て頂きました。

調査区の北西端はで、焼塩壺（食卓塩を製造・販売する容器）が土坑内で横向きの状態で出土する様子を確認していました。説明会後に残りの土を掘削してこの壺の表面を出したところ、表面に刻印が見つかりました。刻印は正方形に近い形で、二重囲の枠の中に、「ミなと　藤左エ門」と印されています。これまでの研究から、この刻印は十七世紀前半のもので、焼塩壺登場の初期に位置づけられるようです。24Ba区の調査でも同様でしたが、24Ｂ区調査区北西端は、もともとの名古屋台地の基盤層のレベルが高いことに加えて、近代以降の造成が深くまで達していたことから、調査面の比較的浅いレベルで、江戸時代の古い段階の遺構・遺物が確認されるようです。付近には、さらに当時のゴミ穴が連続してあるようで、その様子は近々明らかになると思います。また、杭が実際に残存していた遺構についても掘削し、その様子をさらに明らかにすることができました。

説明会後は、調査区南西端の遺構調査が主体となりました。ここでは、成瀬家の屋敷建物方向に向かって細長く伸びる整地層を確認しました。土層断面で見ると、整地は何度も実施され、一部凸状を呈していることが確認されたため、当時の道であった可能性が高いと考えられます。さらにこの道状遺構に対して垂直方向に伸びる柱穴列も確認しています。この柱列が実は杭列であるか、あるいは塀に伴う柱跡であるかは現在のところ不明です。しかし、屋敷建物の南側の敷地で場を区画するものであったことは確かで、当時の屋敷地内での場の利用を考える上での糸口になるものと言えます。なお、この柱穴跡の一つの埋土内からは、陶器の装飾に付いていたと考えられる動物形の製品が出土しています（三頁上段写真上）。尾の形状などから、イヌを象ったモノと思われます。また、道状遺構の東側では大きな土坑がいくつも認められています。常滑焼甕や、半胴甕の底部、土師鍋の大型破片が出土しているところもあります。現在、調査は24Bb区の近世整地層（盛土）下の遺構調査、さらに24Bc区へと進んでいます。

今年度の西二葉町遺跡発掘調査も、すでに予定期間の三分の二程度が過ぎてしまいました。残りの期間は少なくなってきましたが、調査はまだ続きます。折に触れて、調査成果をお知らせできればと考えています。（川添和暁）

説明会資料

アクセスはこちらから

西二葉町遺跡地元説明会資料

西二葉町遺跡 地元説明会資料

開催日時 令和6年9月14日(土)・15日(日)

調査主体 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

調査支援 安西工業株式会社

今回の調査・説明会開催には、明和高等学校および戸田建設株式会社の皆さまの格別なご配慮を頂いております。

調査の経緯

西二葉町遺跡の一角にある県立明和高等学校敷地内では、令和六年度からの愛知県教育委員会財務施設課による校舎建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、本発掘調査を行っています。初年である今年度の本調査は、左図の赤色の区域の二四七〇平方メートルを対象に、五月から十一月中旬までの予定で実施しています。これまで24Ｄ区、24Ａ区と調査は進み、現在は24Ｂ区の調査を進めています。

令和6年度 西二葉町遺跡調査区位置図

これまでの調査成果

これまでの調査では、以下の時代の遺構・遺物が見つかっています。

西二葉町遺跡について

西二葉町遺跡地元説明会資料

江戸時代 成瀬隼人正中屋敷について

成瀬隼人正中屋敷関連の遺構は、これまでの調査区全体で確認されています。建物跡である掘立柱建物跡は、24Ａ区および24Ｂ区でまとまって見つかっています。建物跡は大きな河原石を根石にした掘立柱の構造となっており、同じ場所に何度も立てられた様子を見ることができます。遺構としては井戸のほか、24Ａ区と24Ｂ区では、江戸時代の整地層（盛土）が良好な状態で確認されています。大きな坑を掘って陶器などの廃棄後に埋められることもあり、24Ae区や24Ｂ区では、貝殻を多く含む場所も確認されました。24Ba区では、貝殻のほか、タイ科などの魚骨、鳥骨とともにシカの部分骨が出土しています。ここでは多量の陶器のほか焼塩壺といわれる素焼きの容器も出土しており、ゴミなどを廃棄したものと考えられます。24Ae区では、カマドと考えられる火床（炉跡）が見つかっています。24Ｄ区では多量の瓦が廃棄された堆積層が見つかりました。恐らく明治初頭に屋敷地が解体されならした時に形成されたものと推定されます。

令和６年度西二葉町遺跡調査区と成瀬隼人正中屋敷位置図（縮尺 1/2,000）【屋敷絵図面は、公益財団法人 犬山城白帝文庫蔵】絵図面の作成および記載対象物の年代は不詳ですが、屋敷地の基本的な構造は、江戸時代を通じて大きな変化は無かったようです。絵図面では 24Ae 区の北端にあたる場所にはカマドの印があります。今回の調査では、板石で構築された火床が見つかっており、絵図面の内容を裏付けることができています。

24Ae 区調査写真　江戸時代の遺構調査【遺構を掘り上げた状態の上空写真　上が北】柱穴、溝、井戸、炉跡などの配置がよく分かります。

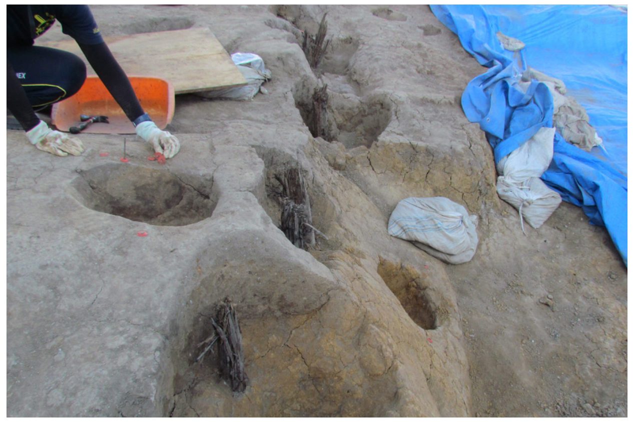
24Ba 区 全体写真【上が東、体育館側】写真左は近代整地層下面での遺構掘削状況、写真右は近代整地層上面での遺構掘削状況です。

3

地元説明会印刷配布資料

※愛知県埋蔵文化財センター HP よりダウンロードできます。

刻印のある焼塩壺（白矢印は刻印部分）


杭の残存していた杭列

柱穴跡から出土した動物形陶製品（イヌ形か）

調査区南西端の様子（白線は道状遺構の断面形状）

24Bb 区 近世整地層（盛土）上の遺構全体写真（上が北）